



ぞう組

年中



梅雨が続く、外に出られない日が多い今月。元々工作好きの人が多いぞう組は、お部屋にいる時間が増え、空き箱や工作の素材があつという間に無くなります。このごろは作った物を使い、劇やショーをよくして過ごしています。

黙々とカレンダーをハサミで長細く切っていたMちゃん。しばらくして「みてみて！ラプンツェルの髪の毛！」の声。見てみると、身長2倍ほどの髪の毛を、頭から垂らしてゆっくり歩いて来るMちゃんの姿がありました。その姿を見てラプンツェル好きの2人も同じように髪の毛を作って、「ねえねえ、ラプンツェルの劇しようよ！」「お家の劇にしよう！」「じゃあお家作らなきゃ！」と、今度は劇をすることに。お家を作り、ご飯を用意し、お客さんを呼んで、かくれんぼのお話をやりました。お話を考えてから劇をするというより、やりながらその場で、「次はこうしよう」と思いついて進めています。“自分の考えを友だちに伝える力”“友だちの考えを聞いて理解する力”がついてきて、子どもたち同士でイメージを共有して遊べるようになってきました。



別の日は、紙を丸くしつなげて、輪飾りを作っている人たちが。長くなった輪飾りをリボンのように動かしてみると、「わあ、きれいー！」と感動の声。「これでショーしようよ！」「いいね〜」とイメージが湧いてきた二人。その時、たまたま通りかかった年長さんに「何持ってるの、へび？」と言われたことをきっかけに、輪飾りがへびに変身！ビニールシートを敷いて『へびと海のショー』を開催しました。友だちのやっていることに、「面白そう」とよく興味を持つ子どもたち。劇やショーを開催すると、クラスの仲間がたくさん集まってくる様子が素敵だなと感じます。



他にも、新聞紙で作った『恐竜の人形劇』や、色を塗った空き箱やカップにライトを照らして『光のショー』などを開催して遊んでいます。日常の経験の中から思いついたり、他の学年や隣のクラスのやっていることを取り入れたり…作品から子どもたちの感性とアイデアが絶えず生まれている日々です。（教諭・細井佑香）





ぴよぴよ

未就園2歳児クラス

クラス
くらす

「ママは?」「おかあさん、どこ〜!!」「かえる〜かえる〜」「ママ〜」……あちらこちらで、泣いている声が響き渡る5月の保育室。2歳児クラス「ぴよぴよ」がはじまりました。

白梅幼稚園には、来年度、年少組になる2、3歳児のお子さんを対象とした未就園児クラス「ぴよぴよ」があります。週1クラスと週2クラスとがあり、それぞれの希望に応じて登録し、月2〜4回、幼稚園の2歳児クラスにあそびに来ます（7月は9時30分から11時30分）。



今年も小さな仲間たちがお母さんと一緒にあそびにやってきました。初めてお母さんから離れて、ぴよぴよの部屋に入っていき子どもたち。目新しい遊具にすぐに飛びついてあそびだす子もいれば、お母さんに必死でつかまって離されないようにしがみついている子がいたり、近づいてこないでと泣いて逃げたり、自分の荷物を帰るまでおろさない子がいたり……と、とっても賑やかな5月でした。そんなぴよぴよさんたちも7月になり少しずつ慣れてくると、自分から入室できたり、乗り物やおままごとなどのお気に入りの遊具に走って行ってあそび始めたり、「泣かないできたよ!」と話せるようになってきたり、靴下を脱いでくつろいでいたりする姿も見られるようになりました。おやつを食べて、絵本やわらべうたのお楽しみが終わったらお迎えが来るとい生活の流れもだんだんとわかってきて、「もうすぐママくるよね〜」と安心して過ごせるようにもなっています。



お気に入りの電車を走らせるために長くレールをつないでいたり、ひもにいろいろなものをたくさん通していこうと粘り強くがんばっていたり、お人形さんやぬいぐるみを散歩させたり、おんぶしたり、「ねつがでた!」と病院ごっこをはじめていたりします。人気のおままごとでは、いつも誰かがお料理をしています。お弁当作りも上手です。1つのお鍋に数人でごちそうを入れて、一緒にかき混ぜたりしていますが、お皿に盛りつけて食べるのは別々だったりするのは見ていておもしろくなります。おともだちがあそんでいるのを見て、やってみたくなった子がその道具を持っていこうとして取り合いになることもありますが、そんなときは、保育者と一緒に「かして」と聞いてみることも始めています。

少しずつぴよぴよでの生活にも慣れてきてはいるものの、ママのお迎えを心待ちにしている子も多く、お迎えのママを見つけたときはとびきりの笑顔をみせ、我先に帰ろうと走り寄り、入り口が渋滞になることも……。

お母さんってすごいな〜と感じる瞬間です。これからも、子どもたちがやりたいことを見つけ、楽しく過ごせるぴよぴよにしていきたいとおもいます。（主任・本橋幸子）



生き物の死と子どもはどう向き合うか

バタちゃん、安らかに



その知らせは突然のことでした。20年来、幼稚園で大事にしていたアヒルのバタが亡くなりました。

羽を動かすとバタバタするので「バタ」。バタは生まれた時から片羽が折れ曲がっていて、片足が不自由でした。そこで、他所にはあげないで、幼稚園で大切に育てることにしたそうです。最近が高齢になり、目は白内障でほとんど見えず、歩かないでじっとしていることが多くなりました。

動かなくなったバタを見つけたのは、年長組の当番の6人。朝、世話をしに小屋を開けたところ、水槽の中でバタが浮いて動いていなかったとのこと。担任が駆けつけると、すでにバタはグッタリとして亡くなっていました。前日、水の中から出て食事をしていたはずなのに、足の不自由なバタはどうやって水の中に自分から入ったのか。「水を飲もうとして入っちゃったんじゃない?」「いや、昨日の雷が怖かったんだよ」。子どもなりに想像を巡らせます。バタは先生たちの手で水から引き上げられ、タオルにくるまれて箱に納められました。小屋から箱が出てくると、年長児が取り囲みます。自ら手を合わせている子どももいます。

知らせを聞いて、他のクラスの子どもたちも集まってきました。毎日のようにバタを見に来ていた年少組のAちゃんは、知らせにきてくれた友だちに手を引かれて駆け寄り、箱の中のバタと対面しました。「なんで、死んじゃったんだよ。ちゃんとご飯食べないからだよ。お水を飲まないからだよ」と、バタに話しかけます。すると、傍にいた年長児が「ご飯もお水も飲んでいたよ。でも、もうおじいちゃんだから」と教えてくれました。

さっきまでバタがいたアヒル小屋。担任の呼びかけに当番の子どもたちは立ち上がり、粛々とデッキブラシを動かし、掃除を始めました。これまで当番は小屋でバタと触れ合えました。この日、当番を楽しみにしていた子もいますし、欠席した子の代わりに自ら望んで当番になった子もいます。その子どもたちにとって、家主のなくなった小屋で、水槽や床や食事用のタライを洗うなど、想像していなかったことでしょう。にもかかわらず、今日の、そして最後の当番の仕事を黙々と果たしています。

7月6日、泳ぐバタ

午後、バタとお別れをしました。

お花を摘んできた子、指編みのリボンを用意した子、バタのバッグを作った子、バタとの思い出を絵にかいてきた子。子どもたちなりに自分でお別れの仕方を考えて、バタの最期を見守りました。





生き物の飼育を通して、子どもたちはたくさんのことを学んでいます。飼育の経験がある子どもは、飼育した生き物の生態を知っているばかりでなく、自分のしている世話はなぜする必要があるのかを理解しています。生き物が死んだとき、その理由について、生き物の生態や自らの世話などと関連させて考えます。

バタの死に遭遇した子どもたちの言葉からは、エサや水の摂取をしないことが死につながることに、さらには老いの先に死があること、つまり生き物に共通する生態から死を理解していることが分かります。本園では、様々な虫や生き物に親しむ子どもたちが多く、飼育経験もよく積んでいます。年少組でカナヘビを飼っている時は、年長さんもエサのクモを取ってきては届けてくれて、ある生き物の生命が別の生き物が生きるために必要な生命であることも理解しているようです。こうした飼育経験は、科学的認識を芽生えさせることにつながります。

それから、バタの亡骸に手を合わせたり、バタを思って描画や制作物を用意したりするなど、死を悼む、喪の行為が自発的になされていました。なかでも、バタとの触れ合いを楽しみにしていた当番たちが、バタが倒れていた小屋を黙々と掃除する姿には大きな成長を感じました。これまで長くバタと関わってきた年長組の子どもたちは号泣するのではなく、年老いていたバタの死を静かに受け止めていたことも印象的でした。翌日も子どもたちはバタのことを気にかけています。Aちゃんは絵本の部屋で、バタに似たアヒルが主人公の絵本を、手にしていました。



バタ、どうぞ安らかに。子どもたちに大切なことをたくさん教えてくれて、本当にありがとう。（本山方子）



多摩六都科学館に行ってきました。 年長

7月6日、延期につぐ延期の末に、ようやく園外保育に行くことができました。気づいたり、考えたり、科学に対する興味を高めたりして欲しいという願いから、白梅幼稚園では今回、初めて多摩六都科学館を見学しました。

館内は、5つの部屋（自然、チャレンジ、身体、宇宙、仕組み）に分かれています。子どもたちは多摩地域の虫や生き物の展示や、川辺の石の展示にも関心を示したりしていました。

最後は、いちばん楽しみにしていたプラネタリウム！丸い卵型の大きなドームの中に、ほぼ360度スクリーンの大迫力。この規模と質は世界一だそうです。スカイタワー（田無タワーではなかった）から映し出された多摩地域の映像が、だんだん暗くなっていき、今の時期の星を観察することができました。

でも、街中は街灯などの灯りで星があまり見えないそうです。そこで街灯や街の光を暗くしていくと（プラネタリウムだから可能）、たくさんの豊かな光が現れてきました。館内が暗くなると「怖い～」と言っていた子もいましたが、この沢山の星たちには大歓声！貴重な体験をすることができました。（教諭・西井宏之・高橋敬子）

